特　別　講　演

日本中世における土木技術史

立命館大学
文学部教授　文学修士　三　浦　圭　一

Keiichi MIURA

I. 研究の状況

日本中世に関する歴史学的研究のなかで，土木史あるいは土木技術史の分野における集大成は，昭和11年（1936）6月に刊行された土木学会編『明治以前　日本土木史』である。（岩波書店）。その内容は10編から構成され，河川・運河・砂防，開墾・干拓・埋立・溜池・灌漑・排水，港津・航路・航路標識，道路・橋梁・渡場・関所，都市造営，城塁，水道，測量・度量衡，土木行政，工事用器具・施工技術に及んでいる。そこには，土木史および土木技術史の面で画期的な発展を遂げた律令国家成立前後の古代と，幕藩制国家成立前後の近世とのはざまにあって，いかに中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代）における土木史・土木技術史が停滞・分散・小規模な時代であったかを繰り返し述べている。

それから半世紀を経た今日でも，土木史・土木技術史からみた日本中世の時代像が大きく変化しているわけではない。なお土木技術史に関する追究は遅れているが，しかし土木史の分野については，数多くの成果がみられる。およそそれは次の3つに分類することができよう。

(1) 中世における土木史の主題は，治水・灌漑史であるといわれているが，戦後における荘園・農村や武士団に関する研究の進展とかかわって，灌漑に関する分野は成果が多い。

(2) 古代都城に起源をもつ京都・奈良の中世都市としての展開や，中世に形成された鎌倉・堺などの港湾都市，守護大名や戦国大名の城下町，寺社の門前町などの研究も盛んだが，最近の歴史考古学による数々の成果は，土木史を含めた都市建設・発展に新たな視点を与えている。

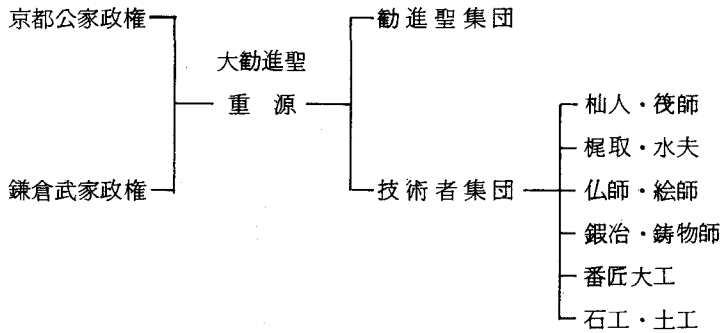
(3) (1)(2)の問題とも関連しながら，中世武士団と居館・城塁の研究が積み重ねられている。

以上の諸研究はまだ集大成される段階にはいたっておらず，とくに土木技術史の面での目的意識的な追究は遅れているが，約50年前に『明治以前　日本土木史』がもっていた，土木史または土木技術史のうえで貧困な時代であるとする日本中世像の認識は，若干の修正が必要であろう。

II. 僧侶と土木事業

『明治以前　日本土木史』は，日本古代・中世の最高の知識階級は僧侶であり，彼らが高級技術の指導者でもあったとして，行基・空海・重源・叡尊・忍性・応其などの名前をあげている。それは正しい指摘であるが，中央国家や地方行政の財政に支えられた大・小の土木事業が期待されなかった中世では，僧侶は土木工事費を調達することと，土木工事に従事する多様な技術者集団を労働編成する役割とを担う必要があった。

〔重源の構図〕



僧侶が土木事業と関わらねばならなかった理由はさしあたって次のようなことであろうと思われる。

(1) 土木事業を慈善救済の菩薩業の一つと観念する。

(2) 海外交渉・新しい技術導入の荷担者である。

(3) 貴重で大型の土木用器材の所有・保管？

Ⅲ. 土木技術の継承と発展

古代律令国家の土木行政のもとで高度に発達した土木技術が，律令国家の衰退・崩壊をうけて，僧侶や土木事業に従事する技術者集団のなかで，中世社会の技術としてどのように継承されたか。また近世幕藩制国家の土木事業のなかで一挙に開花したようにみえるさまざまな新たな土木技術が，中世社会のなかでどのように準備されていたのか。これらを総合的・体系的に明らかにすることができる研究の現状ではないように思われるし，ここでは若干の課題を歴史学的研究の立場から整理することにしたい。

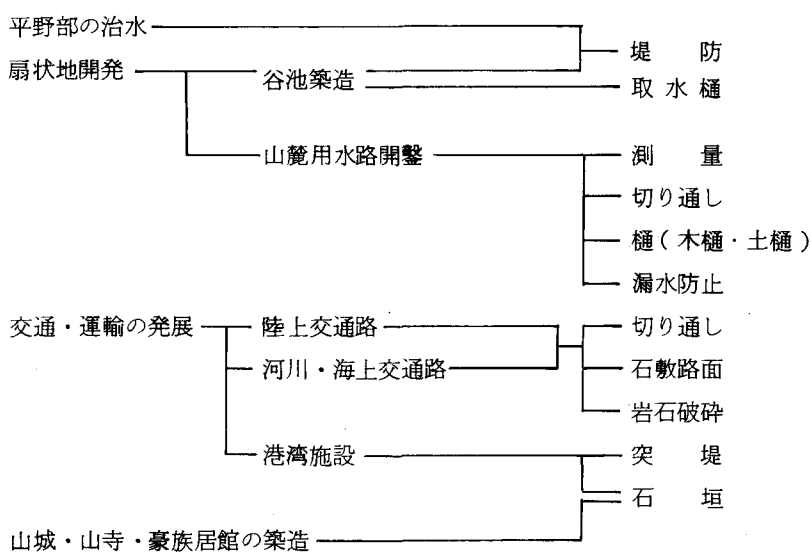
(1) 土木技術は自立的な民間の技術者集団のなかで継承・発展してきた。

土工 ── 堤防築造と河内国日雇頭，道造の黒鍬頭，池の築造と坂の者，井戸掘と河原者

石工 ── 近江の穴太衆と馬渕衆，山城の白川衆，大和の伊氏一族

金工 ── 摂津の加島鍛冶・我孫子金屋・五箇庄金屋

(2) 土木技術発展の背景



(3) 土木工事用諸具の普及と発達

轆轤・滑車・大綱

荷車

玄能・鶴嘴（つるはし）・鑽（たがね）